東京すくわくプログラム活動報告書②　　テーマ：砂水遊び

園名：社会福祉法人たつの子の会
　　羽村しらうめ保育園
活動日時：令和７年１月 23 日
　　午前中
クラス名：こじか組（3 歳児クラス）
年間テーマ：砂水遊び

＜テーマの設定理由＞

12 月末にトンネル堀りを楽しんでいた子どもたち。
数人で始まったことが友たちと繋がりを持ちながら楽しむ姿が見られていた。
今回は大人が意図して大きな砂山を作っていく。そこでの子どもたちの遊び方や、
遊びがどう広がり変化していくか、様子を見ながら関わっていった。

＜活動のために準備した素材や道具＞

砂・水・スコップ・バケツ・板　等

＜活動スケジュール＞

１年を通して砂水遊びを継続的に取り組んでいる。
クラスの活動も後期に入り、友達と一緒に遊ぶ姿も多くみられるようになってきた中で、
ダイナミックな遊びを取り組めるように午前中の十分な時間・空間で砂水遊びを行う。

＜環境をデザインする・探求活動の実践＞

　外遊びに出たタイミングで、大人がスコップで大きな山を２つ作っていく。
「一緒にやりたい！」とスコップを持ち数人集まる。山ができてくると早速スコップで穴を掘る子がいる。
しかし、山が大きいのと、砂が乾燥していることですぐに崩れてしまう。
「崩れちゃう～」との声があり、保育者が「どうしようか」と声をかけると、
「水をかけたらいいんじゃない？」との声。
おままごとのコップやボウルで水をかけ始めるが、
少ししかかけられず「バケツがいい！」と言う。バケツで水を運び始めるが、
「もっともっといっぱいかけて！」と、保育者がシャワーで山に水をかける。
すると、「白砂で固めよう！」と白砂をかける子、「もういいんじゃない？」
「掘ろうよ！」とスコップでトンネルを作り始める子もいた。

「もっとこっち掘って！」「そこ掘ったら崩れるからやめて！」「こっち掘ったらつながるよね！」等、やりとりしながら進める子もいれば、自分のペースで黙々と掘る子、水をかけ続ける子もいれば、白砂をかけ続ける子等、それぞれ楽しんでいた。

　山が大きかったことで、掘るほど崩れやすく、繋がる手前で壊れて「あ～！！！」とがっかりする姿も見られた。その度、水をかけたり山を作り直したり、違うところを掘ってみたり、諦めて違う遊びに行く子がいた。保育者が「手で掘ってみる？」と提案する。
「やる」と言ったのは１人だったが、一緒に掘ってみると、手と手が繋がりトンネルができた。それを見て一緒にトンネルを掘る子や、トンネルに手を入れに来る子がいて、互いにトンネルの中で握手する感覚を笑顔で楽しんでいた。しかし、すぐに崩れる。
また新しい場所で４人が手でトンネルを作り始めた。繋がって喜んだり、違う子が手を入れ崩して言い合いになったりしながらも、保育者も一緒になってトンネルづくりを楽しんだ。　数回繰り返すと、水を流し始める。流れて水の通り道ができていくのを見て、手で川を掘る子がいる。水を流しては掘る…保育者も一緒に楽しんでいると「何してるの？」と様子を見にくる子もいて、加わったり、抜けたりしながらトンネル作り、川づくりを楽しんでいた。最後にトンネルが崩れると、満足したかのように遊びが引いて行ったが、子どもたちが引いたタイミングで、残った川に１人でじっくり遊びにくる子もいた。

＜振り返り＞

・大人が意図して作った砂山を見て、イメージを広げたり、やってみたいという意欲のある子どもたちがいた。
　子どもたちが何に興味を持って遊ぶかを観察しながら、保育者自身が楽しむことで、自分たちなりの楽しみを見つけてさらに遊びが広がっていく様子も見られる。遊びのきっかけづくりや、子どもたちの姿を見てもっと面白くなりそう、こんなことしたらどう広がっていくだろうと環境を工夫していくことも大切だと感じる。
・今回のトンネル作りや川づくりでは、乳児期から砂遊びを楽しむ中で培った経験も大きく感じた。
　どうしたら砂山が崩れないのか、自分たちなりに工夫したり、考え実際にやってみながら、必要な道具を見出す姿は、様々な遊びを経験してきたからこそだと思う。遊びの中で、学び、楽しみながら実際にやってみて得た経験が、また次の遊びや学びに繋がっていくということを実感した。なんでも大人が用意し伝えるのではなく、大人が遊びをどのように見守り、子どもたちが好きな遊びを思い切り遊び込む環境づくり、遊んでいる子どもたちを様々な視点で見守っていくことが大切だと感じる。
・友だちとの繋がりを楽しんでいる姿が増えてきている。同じ遊びの中で気持ちをぶつけあう姿もあるが、それでも“一緒”を選び、楽しんでいる。必要に応じて大人が架け橋になる場合もあるが、子どもの気持ちより先に大人が入らぬよう、今の子ども同士のやりとりを見守っていきたい。